

中学校音楽科における「ボディ・パーカッション」の 意義とその活用

佐 藤 須 美 子

Meaning and Application of “Body percussion” for Classes of Music at Junior-High Schools

Sumiko SATO

Key words : ボディ・パーカッション Body percussion, 山田 俊之 Toshiyuki Yamada, 音楽科教育法におけるボディ・パーカッション Body percussion as a method for music education

はじめに

わが国の中学校学習指導要領における音楽科の教科目標には、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、豊かな情操を養う。」¹⁾と謳われている。現代の子ども達にとって、厳しい社会の中で人と人とのコミュニケーションを基盤にしながら、自分らしさを生かしつつ、社会生活を豊かに営む能力を備え持つということは大変困難なことかも知れない。日常生活の中で営まれるあらゆる人間関係が、その人の人格形成に大きく関与する。すなわち、それは社会性、協調性、自律性など、社会人として要求される人間の根幹と深く関わっている。この世に生を受けた時、まず親と子の関係を出発点として、さまざまな人間関係を経験することになる。それぞれの局面において、少しずつコミュニケーション能力を養うことになるだろうし、また必要となってくる。これらに大きく効力を発揮するものの一つに音楽があることは否めない。山本文茂氏によれば「音楽の持つこのコミュニケーション機能に支えられて、生徒たちはさまざまな音楽活動の中で人間関係の基盤を形成し、生きる力の原動力を育んでいくことができる」²⁾のである。自己を厳しく見つめながら他人を思いやる優しい心、相手の立場に立って物事を

考えるなど、人間らしい心を育むものとして、音楽の果たす役割は大きい。さらに山本文茂氏が述べるように、「音楽活動に宿る連帯感に支えられながら、〈感動体験の共有〉という音楽科固有の価値の実現を通して、〈心の教育〉に深く関与できる」³⁾ならば、集団の中で個が発揮できるメリットを音楽科という教科の中で実現することが可能となるであろう。

一昨年、福岡県久留米市において、ボディパーカッション協会主催の「ボディ・パーカッション研究発表会全国大会」があった。北は北海道から南は沖縄までの200人を越える小・中学校の教師が集まり盛況であったが、音楽科教育法の担当者としては、とりわけ有意義、且つ興味深いものであった。なぜなら、中学校学習指導要領の表現領域に、「カ 表現したいイメージや曲想をもち、様々な音素材を用いて自由な発想による即興的な表現や創作をすること」⁴⁾とあるが、このボディ・パーカッションは、まさに子どもや生徒たちを困難な楽譜（音符）の世界から開放し、自由な発想の世界へ誘い、互いに協調しあって楽しいパフォーマンスを作り出す手段として期待し得るものと確信することができたからである。さらに筆者が打楽器奏者であるところから、共鳴する部分が多いということも事実だが、停滞気味になる授業に「活力」を提供してくれるという意味でも、このボディ・パーカッションに大きな魅力を感じている。かつて中学校の音

楽教師であった大橋悦子さんが、「歌うのが好きな人、楽器を弾くのが好きな人、聴くのが好きな人、自分で曲を作るのが好きな人。音楽にもいろいろあるが、音楽が好きなのは世の中にたくさんいると思う。でも、〈学校の音楽〉はあまり好きじゃないって人いるでしょう。ほんとは音楽が好きなのに、なぜでしょうね。それは①楽譜を読まされるけど、音符や記号がよくわからない。②楽譜どおりに、良い姿勢で、きれいな声で歌わないといけない。カラオケは得意で自信があるのに」⁵⁾と指摘しているように、読譜がネックとなって、音楽の授業嫌いを生んでいる現状があるようにも見受けられる。この状況は決して特異な例ではなく、一般に見られる現象と受け止めてもよいだろう。

以上を踏まえながら、中学校音楽科における授業の効果的な取り組みを、「ボディ・パーカッション」を通して考察してみたいと思う。

1 ボディ・パーカッションの特徴と教育的意義

1-1 ボディ・パーカッションの定義と系譜

最近、ボディ・パーカッション (Body percussion) という言葉をよく耳にする。これは福岡県久留米市の小学校教師である山田俊之氏が、長年の現場での取り組みの中から考案し、命名した音楽表現の一つである。氏によれば、ボディ・パーカッションという用語は次のように記されている。「具体的には、体全体 (ボディ) を打楽器 (パーカッション) にして手拍子、足踏み、膝や腹を叩いてリズムを奏でる音楽活動である。これは昭和61年 (1986年) に、私が小学校音楽の授業、ゆとりの時間、学級活動の中で行った「山ちゃんの楽しいリズムスクール」(自主教材) から子どもたちと発案し、名称は児童が「体全体が太鼓になるね!」からヒントを得て、身体を楽器にした音楽リズム身体表現を「ボディ・パーカッション」と名付けたものである。」⁶⁾ ボディ・パーカッションという名称は山田氏によるものとしても、過去

においてこのような試みがなかったわけではない。本来、身体を自己表現の手段とする原初的行為は音楽の誕生と無関係とは思われないが、音楽教育の分野でいち早く注目したのは、ドイツの作曲家カール・オルフ (1895-1982) であろう。オルフは「シュールベルク *Schulwerk*」と呼ばれる一連の教育用音楽作品を残したが、その中の5巻からなる「子どものための音楽 *Musik für kinder*」の第1巻で、同様な試みを行っている。オルフは音楽のエレメンタリーな要素として言葉・リズム・動きの三つを掲げ、「シュプレッヒ・ユーブング *Sprech übung*」と称する母国語の練習からリズムやメロディーを引き出しているの、身体を使ったリズム練習の基礎は全ての巻に応用されていると言ってもよい。

第1巻の第2部「リズムとメロディーの練習」では、次のような練習から始まる。(譜例1)⁷⁾

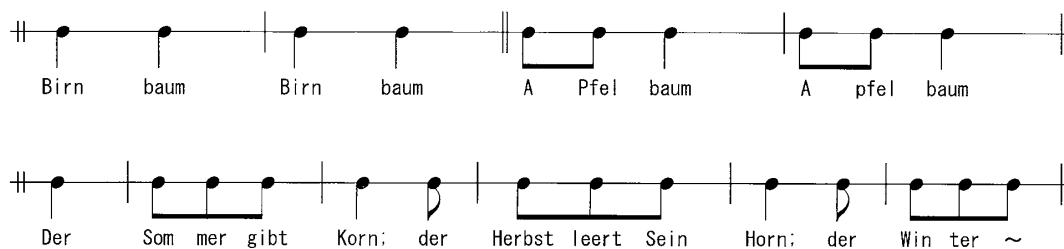
このような練習が十分行われた後、リズムとメロディーの練習に発展するが、リズムではここで手拍子 (*Klatschen*) に膝うち (*Knieschlag*) と足拍子 (*Stampfen*) が加えられる。さらに進むにつれて指鳴らし (*Fingerschnalzen*) も登場する。(譜例2)⁸⁾

また、リズム練習は一人 (*Solo*) と全員 (*Tutti*) という応答形式でも繰り返され、数小節の提示に対して即座に応答する即興問答に発展する。(譜例3)⁹⁾

これらの練習には常にシュプレッヒ・ユーブングの裏づけが求められている点に特色がある。(譜例4)¹⁰⁾

言葉のリズムを介した音楽化には、次のような例も見られる。(譜例5)¹¹⁾

その後、オルフのほかにも、手拍子、ハンドクラッピング、ヴォイスリズムと呼ばれて、教育実践家や作曲家によって、このような試みはさまざまな形で実践されてきた。しかし、わが国の音楽教育の切実な現実から生み出され、子どもたちに喜びと感動を与えることを願って誕生したボディ・パーカッションは、その創造性と独自性から教育現場に新たな旋風を巻き起こ



譜例 1

手拍子

ひざ打

足拍子

譜例 2

(一人)

(全員)

譜例 3

例 1
(前半)

(後半 a)

(後半 b)

課題 5

譜例 4

Tromm, tromm, tromm

Tromm, tromm, tromm, hut dich Baur ich komm! Ich bring dir nichts, ich nimm!

trrrromm

譜例 5

しているといっても過言ではないだろう。次に山田俊之氏のボディ・パーカッションの活動を改めて振り返り、ボディ・パーカッションに秘められた氏の教育理念とその魅力を探りたい。

1-2 ボディ・パーカッションの教育的意義

山田俊之氏の作品は、他の作品と違って難解なものではなく、きわめて簡単で且つ楽しく、子どもから老人まで誰でもできるのが特徴である。従来の打楽器作品にはかなりの音楽的教養・経験を要するものが多いが、氏の取り組みは、楽譜に依存せず参加できるというところが、大きな特色となっている。彼の弁を借りるなら、「楽器がなくても、音符が読めなくても、歌が上手に歌えなくても、誰もが音を楽しむことが出来る音楽」¹²⁾なのである。

山田氏がこのような実践を試行するようになったきっかけは、クラスにおいて問題行動を起こし、同級生たちを困らせていたある児童を、いかに授業に惹きつけるかというところから始まったという¹³⁾。子どもにとってネックとなる楽譜はほとんど使われないので、読譜に伴う既成の概念で束縛されることはない。そこで重要視されるのは、生き生きとしたリズムから生ずるバランスやノリである。リズムは言葉や体を使って表現されるが、その実践の中にテンポ・強弱・音色・表情・アインザッツなど、音楽を構成する基本的要素が含まれている。さらには模倣や即興を通して、形式感や創造性を培うことも可能である。これらが子どもたち一人ひとりの感性を揺さぶり、自己の内面に直結した自発的なパフォーマンスとなって湧き上がってくるところに大きな特徴がある。

山田氏が自ら執筆した論文によれば、1986年に始まり今日に至るボディ・パーカッションの活動の歩みは次の5期に分けられる¹⁴⁾。

- 第1期 リズム遊びから手拍子アンサンブル曲に発展した時期
- 第2期 手拍子の合奏から体のアンサンブル曲へ移行した時期
- 第3期 さまざまな種類の楽曲教材として発展した時期
- 第4期 障害児教育、不登校児の音楽療法として活用した時期
- 第5期 小学校の音楽科授業、ピアサポート教材として活用した時期

上記のプロセスをみてもわかるように、リズム遊び

から手拍子、体のアンサンブルへと表現手段が拡大すると共に、新たな魅力的な教材が子どもたちのヒントから開発されている。やがて不登校の小・中学校児童生徒や障害児を対象にした音楽遊戯療法に発展し、今ではピアサポート（仲間づくり）の教材としても活用されている。アンサンブルは社会の縮図ともいわれるが、アンサンブルのもつ協調性を通して、ややもすれば歪みがちになる現代社会における子どもたちの人間関係を、たおやかにしようとするねらいが込められていると言ってもよい。また、ボディ・パーカッションは常に単独に扱われるものでなく、歌唱教材・鑑賞教材などにも活用され、新たなアプローチからの楽曲理解に大きく貢献している。

1-3 ボディ・パーカッションの教材について

簡単で楽しいボディ・パーカッションに取り組んだ子供たちは、感動体験を通して、全体の中の一人であることの喜びを肌で感じることができるようになる。（大げさではあるが）生きている喜びを感じ、自分が音楽表現できた充実感と満足感に浸ることもできる。そしてそこから、アンサンブルの楽しさと喜びを知るのである。山田氏の取り組みは、3巻からなる楽譜集、『楽しいボディパーカッション①②③』の中にほとんど集約されている¹⁵⁾。指導者は彼の作品に限らず、どの作品に取り組むときも楽譜に依らず、生徒の表情を観察しながら臨機応変に対応し、子どもたちの自由な発想や即興性を引き出す一助となることが望ましいとされる。その時がまた、指導者独自のセンスや工夫を生かして子どもたちに関わることの出来る楽しい瞬間なのである。

ここで、山田氏の実践から生まれた3巻の楽譜集『楽しいボディ・パーカッション①②③』の内容を分類しながらより具体的に紹介してみよう。全体は次の7つのグループに大別することができる。

1. 応答形式でリズム・動作を模倣させる作品

氏の取り組みの原点になるものは、「言葉・動作・模倣・問いと答え」である。これはまさに、カール・オルフの提唱した子どものための音楽教育の原点であることがわかる。例えば、「皆さんリズム」や「まねっこリズム」は、問いと答えの形式でリズム・動作を模倣させるというもの。話しことばをそのままリズム・フレーズにして、リズムにのりながら動作を認知、確認させて模倣へと導く。集中力を養いながら音楽遊

びをさせるものである。

2, わらべうたや愛唱歌を歌いながら、手拍子等のリズムをつけることにより、拍子感を培う作品

例えば、「あんたがたどこさ」や「かっこう」などは、手拍子・膝打ち・指チップ等を歌いながら同時に行うことにより、2拍子や3拍子等を身体で理解させることの出来るもので、楽しみながら学習の効果が大きい。

3, ボイス・アンサンブルによる作品

ボイス・アンサンブルで書かれたものの中には、まず打楽器の刻むリズムを声のアンサンブルで楽しむものとして、「ドラミング・ボイス」や「カラン・カラン・コロ」がある。特に前者はドラムセットのロックのリズムを、3パートに分けて声のアンサンブルで表現するもので、お互いのパートを聴きあいながらバランスを考え、リズムに作り上げてゆく。音楽的効果を狙うなら、かなりやりがいのある作品。「ずいずいずっころばし」や「森の熊さん」などは歌とリズムのパートに分かれてのボイス・アンサンブルで、拍子感やバランスを感じながら楽しむことができる。

4, 日常の言葉がそのままリズム・アンサンブルになった作品

日常の言葉がそのままリズム・アンサンブルになっているものには、「フルーツ・アラカルト」「みんなでグー・チョキ・パー」「ワン・ニャー・プー・コケッコウ」「ケチャ風味お茶漬け」「ほかほかパン屋さん」「ピーチク・パーチク・ポンポコリン」などが挙げられる。

5, 日常言葉と手拍子のアンサンブルで構成されている作品

日常使っている言葉と手拍子がアンサンブルになっているものに、「がんばれチャチャチャ」「赤組ファイト!!がんばれ優勝」そして日本の伝統的な手締めの儀式をモチーフにした「祝いの手打ち」がある。これらは手拍子をしながら掛け声を入れるもので、日本人特有の感性をタイミングよく折り込みながら生き生きと表現することで、その場の雰囲気最高に盛り上げることができる。

6, 特定の動作をテーマとして扱った作品

動作がテーマに書かれたものには、何小節かのリズムパターンを簡単な動作で繰り返し、他のいくつかのグループが同じ動作の模倣で4小節遅れのカノン表現する「花火」がある。これは大人数で表現するもので、単純なリズムと動作で大きな大輪の花火をいくつも作り上げていく。もちろんこれをやるには広い教室が必要になる。「サークル・ビート」「大地のひびき」「クラップ&ストンプ」「波のささやき」「スター・ラン」「スター・ジョグ」のように手拍子、膝打ち、腹や尻から腿まで上下に叩くなどして、タイトルのイメージを作り出すものもある。

7, 単純な手拍子のみの作品

単純に手拍子のみのアンサンブル作品がある。まず「カノン形式による手拍子アンサンブル1・2・3」,そして「ムービン・スター1・2・3」「手拍子のアンサンブル」である。純粋に手拍子のみの作品は、各パートがシンプルではあるがカノン形式であるがゆえに、かえって緊張感・高揚感を体験しながら参加できる。そしてより立体的なリズム表現を心がけながら、お互いに聴きあい協調することで本格的なアンサンブルの喜びを味わうことが出来る作品となっている。

以上、山田氏の作品をアンサンブルの形態から分類してみた。これらの中には中間部にアドリブ部分があり、子どもたちにグループで楽しく工夫しながら即興でリズム表現できるよう作られているものもある。

2 「音楽科教育法」におけるボディ・パーカッションの取り組み

2-1 「音楽科教育法」の目的と現状

本学では、中学校教諭2種免許状取得希望者に対して、「音楽科教育法」という授業が開講されている。受講者は、学生総数の3割強が希望していた数年前と比べて、現在は2割に満たない人数である。入学者の著しい多様化もあって、音楽的能力にも大きな差が生じているのが現状である。教育実習を控えてのこの「音楽科教育法」でも、ピアノを苦手とする学生も珍しくない。その為「簡易伴奏法」の授業において、その指導者と指導内容に期待するところが大きいのも事実である。

「音楽科教育法」での取り組みとしては、根幹となる中学校学習指導要領に基づきながら、学習指導案の

作成を目標としてそれに沿った模擬授業を体験させている。模擬授業の題材は、歌唱・器楽・創作および鑑賞の領域から学生自身が選ぶのであるのであるが、教育実習という観点から、歌唱指導を一度は経験させたいところである。

平成10年7月、文部省（現在の文部科学省）の教育課程審議会は、これからの教育の根本方針として、各学校が「ゆとり」のある教育活動を展開する中で、生徒たちに「生きる力」をはぐくんでいくことを目指して、次の4点を提言した。

- ①豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること。
- ②自ら学び、自ら考える力を育成すること。
- ③ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること。
- ④各学校が創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校づくりをすすめること。

現在、中学校学習指導要領は改定作業が進行中であるが、本学における「音楽科教育法」においては、従来の方針の中で特に③と④の2点に着目しながら、学生にとって有意義且つ特色あるものを主眼として授業を進めてきた。すなわち、筆者が打楽器を専門としているので、その特色がだせるようボディ・パーカッションに焦点をあて、教育現場における可能性を考察すると同時に、その教材化につとめている。学生の実態を見た上で、可能であればボディ・パーカッションを積極的に実施させていただくよう指導している。

2-2 ボディ・パーカッションの教材化への試み

前項でも述べたように、学生たちの能力の多様化から、本学における授業計画や実施方法にも工夫が必要となってくる。授業にメリハリをつけるためにも、学生の積極的授業参加を狙う思いからも、ボディ・パーカッションは教材研究の中できわめて有効な実践対象となっている。学生は期待どおり、授業への興味・関心を表わし、意欲的に授業に参加している。取り組みとして、できるだけ多くの作品を紹介したいところであるが何分にも時間に限りがあるのが現状である。音楽を専門としている学生たちであるので、興味を殺がないためにも、技巧的にはより高度と思われるものも混ぜ合わせ様子を見ながらの実施である。面白

いことに、音程のないリズム譜はかえって読譜に苦戦する時もあるようだ。山田俊之氏のシンプルな作品を紹介する際は、学生たちの反応を注意深く観察しながら教材研究として進めていくのであるが、彼らはそのシンプルさに驚きながらも理屈抜きに楽しさを感じ、心を一つにしながら各自の感性にそって自発的パフォーマンスを即興的に生み出すのである。この気持ちの積極的な授業参加となり、学生間の相互理解のきっかけとなつて、より楽しくスムーズな授業運営につながっている。

それでは、教材として取り上げている作品とその具体的な指導方法を、以下に紹介する。

1, ヴォイス・リズムの作品

- ①野菜の気持ち…古谷哲也作曲
- ②日本のうた…長井桃子作曲
- ③ヒロシマの気持ち…佐藤須美子作曲

2, 手拍子の作品

- ④パターンズ…K. スターマー作曲

3, 手拍子・膝打ち・足踏み・指チップを使った作品

- ⑤ロックトラップ…W. シンステイン作曲
- ⑥手拍子のための音楽…小長谷宗一作曲

4, 山田俊之氏の作品（1-3に紹介）

①はバナナ・キャベツ・しいたけ・ぼんかん・ピーナツの言葉を、それぞれ言葉の持つアクセントを生かしながら掛け合いをするもの。後半にはマツタケや竹の子も陳列される。5グループに分けて、各班希望によりパート決めをする。終始明確な言葉の発音が要求される。この種の作品にはまさに「言葉の織物」を作っていく面白さがある。その中で、ぼんかんの役割がフレーズの良し悪しを決定させる。展開部では、それぞれの言葉を連発して盛り上げてゆく。身体の動きの導入を学生たちに暗示し、自発的且つ効果的表現が生まれれば嬉しいがいつもうまくいくとは限らない。最後のぼんかんの一言がすべてを決定付けることを告げ、効果的な表現の工夫をするよう指導している。

②は日本列島を北海道・関東甲信越・関西・中国・九州の5パートに分けて①と同じく言葉の布地を織っていくもの。これも希望にそって担当を決めているが、自分の出身地方を選んでくれるのが嬉しい。リズム的には難易度はかなり高い。作品の雰囲気をはっきり掴んだところで、地名ではなく種々のパー

ジョンでトライさせてみると、それぞれのグループ性を顕著に見ることができて想像以上に面白い。言葉のリズムをよく理解した上での自由な発想による表現の工夫である。

③は①の「野菜の気持ち」にヒントを得て、我々の住んでいる現在の広島を、代表的なものを並べながら筆者なりの郷土愛をリズム作品に仕上げたもの。2分足らずの小品である。ここに並べるにはあまりにも拙作であるが、学生たちへの創作の見本として作ったものである。(譜例6)

④については、純粹に手拍子の作品で、7曲からなる組曲である。それぞれ4小節のモチーフとなるパターンが、4声部に分かれカノン形式をとったりユ

ニゾンになったりと変化する。効果的表現を狙えばかなりの音楽的教養と経験を要するもので、立体的リズム表現をポイントとしながら各声部の役割を感じ取り、全体のバランスを聴き取りながら本格的なリズムアンサンブルに仕上げていく。

⑤と⑥については、楽譜が要求しているリズム表現と動きに、表現したいイメージを自由に拡大しながら、より豊かな想像力により高度な作品に作り上げていく。難易度がかなり高いため、学生の条件と時間的余裕をみて発展させる。まずは譜面を忠実且つ充分に再現しながら、アンサンブルの面白さと楽しさを味わわせることを目標としている。

ヒロシマの気持ち

かつ と ば せ カ ー ブ も み じ ま ん じ ゅ う
 かつ と ば せ カ ー ブ こ し あ ん
 かつ と ば せ カ ー ブ カ ッ タ ン コ ッ ト ン

ほ ん し や 前 お の み ち し ま な み し ま な み
 つ ぶ あ ん カ キ お こ の み や き か い ど う
 ひ ろ で ん ひ っ く り か え し て カ ッ タ ン コ ッ ト ン カ ッ タ ン コ ッ ト ン

げ ん ば く ひ ろ し ま 城 ビ ッ グ ア ー チ
 ド ー ム 前 カ キ ひ ろ し ま 菜 ア ト ム
 ひ ろ で ん マ ツ ダ 広 テ レ ダ イ ソ ー 中 電 ア ス ト ラ ム

サ ー ン フ レ ッ チ ェ (手 拍 子 の み) オ レ
 サ ー ン フ レ ッ チ ェ オ レ
 サ ー ン フ レ ッ チ ェ オ レ

譜例6

2-3 取り組み後の成果について

学生たちがボディ・パーカッションに取り組む時の表情は生き生きしている。難易度にもよるが、ほとんどの場合、日常の事柄から放たれて表情が開放的になる。実力の差などすっかり気にせず、無邪気な子供に戻っているようにも思われる。場合によっては、他の音楽表現では味わったことのないまでの緊張感も体験する。これが想像以上に学生たちにとって、快感であり充実感であり満足感につながっているように見受けられる。このときこそが各々の学生の個性が明確に現れる瞬間である。教室は明るい笑いに満ち溢れ、指導者としても大きな充実感を味わうことができる。ボディ・パーカッションに取り組むことで、全ての表現

活動において積極的参加の姿勢が見られるようになり、授業運営がスムーズに行えるようになった。作り上げるプロセスにおいては、互いを思いやり、認め合い、信頼しあい、協調しあう気持ちが大きく養われ、音楽教育の意義を正に見出すことができたと確信する。

最後に、学生各自のセンスに任せヴォイス・リズムの小品を作り提出させたものの中から数点紹介したい。予想どおり、自由な発想により個性を生かしての楽しいものが出来上がった。即座に、それらを全員で表現活動してみたが、どれもが独創的なもので、言葉のリズムを生かしながら、生活感溢れる若々しい作品に仕上がっていた。遠慮なく相互評価しあい感動しあった。各自の持ち味が面白かった。

はっぴ〜くりすま〜す

ジングルベルジングルベル ジングルベルジングルベル リン リンリンリン リン リン リンリン
ト ナ カ イ は し る よ
ツ リ ー かざろ ピカピカ

あ わ てんぼ の リン リン リンリン ジングルベル ジングルベル
それゆけそれゆけ それゆけそれゆけ クリ ス マ ス ま え に
プレゼント なにかな? サン タ ク ロ ー ス ク ッ し た ど こ だ?

やっ てきた! リン リン リン リン ゆ ー き や コ ン コ ン サ ー ン タ サ ー ン!
あちゃ エ ン ト ツ の ぼ っ て どっ こ い し ゃ! メ リ ー ク リ ス マ ス!
ど こ だ? あちゃ そろそろ ね な き や サ ー ン タ サ ー ン!

譜例 7

お正月

よしののさとにふれるしらゆき
たづくりおにしめだてまきくりきんとん
ゴーンゴーンジャラジャラジャラパンパンかみさまに

5
ハイッハイッおてつきさあなんでしょうひやくにんいっしゅ
くろまめくわいなんでしょうおせち
しんねんのごあいさつなんでしょうはつもーで

譜例 8

カレーまでの道のり

トントントントントントンじゃがいもピーマン
ぐつぐつにこんでまだ!にんじん
ごっはんごっはんわいわいごはんまだ?えー

7
じっくりにこんでぐつぐつぐつぐつぐつぐつぐつぐつはいっいただきます
コトコトトロリトロリトロリできたよいただきます
3
いーにおいはーやくはーやくカレーだいいただきます

譜例 9

お魚になったワタシ

おさかなになった わたし はしゃぐ こいは いけのこい
おさかなになった わたし あまえび きす のあじ こんぶ
おさかなになった わたし かれいなぶりっ こ こまつ たこ ふね

5
むねのたいは だかれない じりじり こがす
たいやき だいて だいてだいて しろい さんかく みとれるビキニ
きんぎょ きえた にんぎょ ピールに よくあう あし

9
き みー は きみは い か た べ た か い はう まっ ち
ひらめいた ひらめいた い か さっ ぱり あ さり
ます ます さけぼう い か し み じ み さ ざ な み

13
さ ざ え さ ん さ ざ え さ ん ゆ か い だ な ヘイ!
わ か め い く ら た い こ さ ざ え さ ん は ゆ か い だ な ヘイ!
か つ お の り す け さ ん ゆ か い だ な ヘイ!

トリの合唱

The musical score is written for four staves, each representing a different vocal part. The time signature is 4/4. The lyrics are in Japanese, using onomatopoeic words for bird sounds and body percussion.

System 1 (Measures 1-5):

- Staff 1: カッコウ, カッコウ, カッコウ, カッコウ, ホ ホケキョ
- Staff 2: (rest), ピ チク パ チク, (rest), パ チク, (rest), クルッポー
- Staff 3: (rest), (rest), ガーガー, ガーガー, クワックワッ
- Staff 4: (rest), (rest), (rest), (rest), ピヨ ピヨ

System 2 (Measures 6-10):

- Staff 1: カッコウ, ホ ホケキョ, カッコウ, ホケキョ ホケキョ, //
- Staff 2: ピ チク パ チク, クルッポー, ピ チク パ チク, ピ チク パ チク, //
- Staff 3: ガー ガー, クワックワッ, ガー ガー, クワックワックワックワッ, //
- Staff 4: ピヨ ピヨ コケ, ピヨ ピヨ, ピヨ ピヨ コケ, コケ コケ コケ コケ, //

System 3 (Measures 11-14):

- Staff 1: //, //, カッコウ, ホ ホケキョ, カッコウ, コケ コケ
- Staff 2: //, //, クルッポー, クルッポー, クルッポー, コケ コケ
- Staff 3: //, //, ガー クワックワッ, ガー クワックワッ, ガー クワックワッ, コケ コケ
- Staff 4: //, //, コケコッコー, コケコッコー, コケコッコー, コケ コケ

譜例11

夏の風物詩

かきごおり すいか アイス とうもろこし

うみ パーベキュー あつ おひさま ギラ!

なつやす み むし とり かぶとむし

あつ あつ あ——つ——い——
(けだるそうに)

ひやしちゅうか ながしそうめん ひやしちゅうか ながしそうめん

プール キャンプ プール キャンプ

はなび はなび はなび はなび

う——ち——わ—— あついあつい あついあつい クーラーうちわ せんぶうき

やきそばわたがし りんご あめ うたれた! なつやすみ わーい

おばけやしき こうしえん なつやすみ わーい

なつまつり ぼん おどり あつ なつやすみ わーい

み——んみ——ん なげました! カキーン!
(実況するように) なつやすみ わーい

3 考 察

すでに見てきたように、表現領域におけるボディ・パーカッションの果たす役割には、計り知れないものがあると思われる。現に学生たちに満足感を与えながら、音楽表現に対する関心や興味を持たせることができた。その上、創造性・即興性・積極性・協調性・社会性までも身に付けさせることが出来たようにも思われる。

ボディ・パーカッションに用いられる身体各部位のリズムは、相応しい楽器に置き換えられて、各種打楽器への導入を容易にしてくれるだろうし、学生や生徒の作った作品は、記録の手段として逆に記譜の必要に迫られることにもなるだろう。また、山田氏の実践例に見られるように、歌唱教材や鑑賞教材などと併用するなど、指導者のアイディア次第で、まだ計り知れない応用範囲が広がっていることも推察される。いずれにしても生徒の感性を引き出し、さらに磨いていく一つの手段として、また表現活動において主体的に音楽への関心・意欲を喚起するものとして、ボディ・パーカッションは今後も大きな役割を果たすものとして注目されるのである。

4 要 約

子どもが大人になってゆく過程において、人と人のコミュニケーションが人格形成に大きく関わってくる。すなわち社会性・協調性・自律性など人間の根幹である。そのとき、私たちが音楽と交わることで、音楽の持つコミュニケーション機能に支えられて、様々な音楽活動のなかで人間関係の基盤を形成し生きる力の原動力を育むことができる。この論文では、中学校音楽科における授業の効果的な取り組みを、音楽活動の原点とも言うべき「ボディ・パーカッション」を通して考察してみた。アンサンブルは社会の縮図とも言われるが、特にボディ・パーカッションでのそれはそのとき育まれる協調性をとおして、ややもすれば歪みがちになる現代社会における子どもたちの人間関係をたおやかにする力があるように思われる。また子どもの感性を引き出しさらに磨いていく一つの手段として、また表現活動において主体的に音楽への関心・意欲を喚起するものとして今後も大きな期待がかけられている。

引 用 文 献

- 1) 文部省編, 中学校学習指導要領(平成10年12月)解説一音楽編一, 6 (1999), 教育芸術社, 東京
- 2) 山本文茂編著; 序・これからの中等科音楽, 中等科音楽教育, 9 (2000), 中等科音楽教育研究会, 東京
- 3) 山本文茂編著; 序・これからの中等科音楽, 中等科音楽教育, 9 (2000), 中等科音楽教育研究会, 東京
- 4) 文部省編, 中学校学習指導要領(平成10年12月)解説一音楽編一, 20 (1999), 教育芸術社, 東京
- 5) 大橋悦子; 放課後の音楽レッスン, 8 (2003), 晶文社, 東京
- 6) 山田俊之; 子どもたちが楽しんで音楽にかかわり, 創造的に表現するボディ・パーカッションを取り入れた音楽教育の歩み, 音楽教育実践ジャーナル, 創刊号, 28 (2003), 日本音楽教育学会, 東京
- 7) Carl Orff; ORFF-SCHULWERK MUSIK FÜR KINDER I, 68 (1950), B.Schott's Söhne·Mainz, Germany
- 8) Carl Orff; ORFF-SCHULWERK MUSIK FÜR KINDER I, 78 (1950), B.Schott's Söhne·Mainz, Germany
- 9) Carl Orff; ORFF-SCHULWERK MUSIK FÜR KINDER I, 71 (1950), B. Schott's Söhne·Mainz, Germany
- 10) Carl Orff; ORFF-SCHULWERK MUSIK FÜR KINDER I, 82, 84 (1950), B. Schott's Söhne·Mainz, Germany
- 11) Carl Orff; ORFF-SCHULWERK MUSIK FÜR KINDER I, 27 (1950), B. Schott's Söhne·Mainz, Germany
- 12) 山田俊之; 子どもたちが楽しんで音楽にかかわり, 創造的に表現するボディ・パーカッションを取り入れた音楽教育の歩み, 音楽教育実践ジャーナル, 創刊号, 29 (2003), 日本音楽教育学会, 東京
- 13) 山田俊之; 子どもたちが楽しんで音楽にかかわり, 創造的に表現するボディ・パーカッションを取り入れた音楽教育の歩み, 音楽教育実践ジャーナル, 創刊号, 28 (2003), 日本音楽教育学会, 東京
- 14) 山田俊之; 子どもたちが楽しんで音楽にかかわ

- り，創造的に表現するボディ・パーカッションを取り入れた音楽教育の歩み，音楽教育実践ジャーナル，創刊号，29（2003），日本音楽教育学会，東京
- 15) 山田俊之；楽しいボディパーカッション①リズムで遊ぼう，（2001），音楽之友社；楽しいボディパーカッション②山ちゃんのリズムスクール，（2002），音楽之友社；楽しいボディパーカッション③リズムで発表会，（2004），音楽之友社，東京

Summary

Communication between adults and children greatly effects a person's character-building as he or she grows up. And that becomes the root of a person to be social, cooperative, and independent. When music comes to be a part of a person's life, its communicative power can form a starting point for creating a good relation with other people and can be a power to make his or her life fruitful having various music activities.

In this paper, the writer studies effective teaching methods for music classes at junior high schools referring to 'body percussion', which is considered to be a root of music activities. An ensemble is often called to be a miniature society. And the ensemble style of 'body percussion' can be a power to make good relations between children in the tough modern society. It is also true that 'body percussion' can work as a tool to extract and shape children's various senses. It should also work to stimulate children's interest and desire for music.